

喧嘩ならよそでやれ

観葉植物

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

対象年齢が5〜8歳の少女アニメが好きな真正のオタクのお話

目次

プロローグ

契約しました

1

足踏み入れました

6

6 騎聖

出会いました

9

不幸な1日でした

12

プロローグ

契約しました

俺の名前は黒霧透、魔法少女ららが好きなどこにでもいる高校生だ。今日は秋葉原まで、ららこたんの限定フィギアを買いに来ている。つと誰にしているか分からない自己紹介をしながら目的の店にむかっていた。

気合いが入りすぎていて少し目が血走って途中チラシを配っているメイドさんに避けられたのはここだけの秘密だ。今は春休みでこの休みが終わると2年生になる。気温が上がってきて最近朝起きるのがつらくなってきたなあなどと考えていながら歩いている時に、急に声をかけられ、はっと我に返る。

「すみませーん」

前方から端正な顔立ちでボーイッシュなショートカットの黒髪美女が声をかけてきた。

俺は基本、人に声をかけられることはない。なぜなら身も心もららこたんに捧げているからだ。常にららこたんがプリントされたTシャツを身に纏っているため、自動的にATフィールドが発動されている。俺のATフィールドを潜り抜け声をかけてこられ

るのは、俺と同じ同志か友達ぐらいのため、現実を受け止められないまま、とりあえず返事だけはしておくことにした。

「どうかしましたか？」

「私、魔法少女らからの限定フィギア買いに来たんですけど道に迷ってしまつてどこのお店に売っているか知りませんか？」

なんと目の前の美女は俺と同じ同志だった。

「俺も同じものを買いに来たんですよ、一緒に行きますか？」

「いいんですか！お願いします」

同志に優しくするのは当然だよね！下心なんてないよホントだよ。

彼女との、ららこトークは白熱し、途中は言い合いになるようなこともあったがとても楽しかった。フィギアも無事ゲットすることができ、休憩がてら近くのメイド喫茶に入ることにした。

「今日はありがと！助かつちやた」

「いえいえ、こつちも楽しかったから」

彼女と談笑をしながら頼んだオムライスがくるのを待っていたが中々こず、彼女との会話もひと段落したため健気に働くメイドさんを心の中で応援していると、彼女に冷たい目で見られていることに気づいた。

「やっぱり男の人ってああいう可愛い女の子が好きなんだね」

「いや、全然そんなことないよ」

急に言われた言葉に思わず否定しようとしたが全然出来なかった。

「……」

「……」

しばらくの沈黙が続いた後に彼女がこう切り出してきた。

「私の前でもし次そういう目で女の人見たらどうする？」

なんかいきなり怖い質問がきたんですけどーと心の中で叫びながら考えた方がいい考えが浮かばず安易にこう言ってしまった。

「何でも言うことを一つ聞きます」

彼女はこの言葉聞いた瞬間悪魔のような笑顔を浮かべ、すぐに悪手だと気づいたが遅かった。

俺はこの時は知らなかった、彼女が本当の悪魔だということに。

そんな時に、明るく元気な声が飛び込んできた。

「お待ちせしました！手作りオムライスです！」

やっと来たのかと声の方を見ると、今朝のチラシを配っていたメイドさんだった。心の中でお前かーいと突っ込みながら固まってしまった。

「んんっー」

という咳払いで我に戻ったが遅かった。彼女は口パクでア・ウ・トと伝えとても素敵な笑顔を浮かべていた。

その後メイドさんが文字を書いてくれたり、おまじないをしてくれたりしたが全く頭に入ってこなかった。メイドさんはごゆっくりどうぞーつと言って忙しそうに仕事に戻っていった。

「目つぶってて」

約束のことだと分かり大人しく目をつぶる。どんな恐ろしいことかと思っていたら、ご褒美の流れだったため、ラブコメ展開キター!!と心の中でファンファーレが鳴っている時に、急に頭をつかまれ勢いよく何か唇にあたり唇を切ってしまった。痛みで目を開けると同時に彼女の舌が歯茎と唇の間に入ってきて傷口を舐めとっていった。あまりの早業に呆然としてみると、彼女は笑顔で鞆から小さな紙袋を出して自分に渡しながらこう言った。

「契約完了、体の何処かに紋章が出てきたら連絡してね、あと紙袋の中身は無くさないように、私の名前はリリン、君の名前は？」

「黒霧透です」

彼女の言っていることの意味が分からず、何とか質問を返すと満足そうに頷き席を立ちながらこう言った。

「バイバイ私の下僕君」

彼女はそう言い残すと足早に店から出ていった。

紙袋の中身は10 cm程の長さで後ろに鈴紐で針と鈴を結んである奇妙な針15本と彼女の連絡先だと思われる数字の羅列が書かれた紙だった。色々なことがあつて状況を整理できていないが、分かったことは自分のファーストキスは血の味だったということだ。

足踏み入れました

秋葉から帰り、ベッドにダイブして1日を振り返るが振り返ることが多すぎて上手くまとめることができなかつた。まるで夏休みの宿題が多すぎてどれから手をつければいいか分からないような感覚だ。ららこたん人形に話しかけても返答が返ってくることもなかつた。誰かに見られたら切腹ものだと思いつながら目をつぶり、今日は寝ることにした。

翌朝俺は、この世で一番嫌いな音で目を覚ます。そう音の発信源は目覚まし時計だ。起きた時にはご丁寧に太陽もいつもどおり昇っていた。

「毎日昇ってたらありがたみが薄れるから昇らない日があつてもいいんじゃないの？」

つと朝のイライラを太陽にぶつけながら洗面所に向かった。

洗面所で顔を洗っている時に違和感に気づく。左目の黒目のところに二重丸のような赤い模様が出ていた。意識は一気に覚醒して、昨日会ったリリンの言葉を思い出す。

『体の何処かに紋章が出たら連絡してね・・・』

携帯の電源を入れ電話をかける何回かコール音がしたあとにリリンは出た。

「ハロハロー、紋章が出たのかな？」

此方は焦っているのに彼方は能天気な返答が返ってきたため少しイラツとしたが抑えて彼女に説明を要求した。

「私ね、冗談とかじゃなくて本当の悪魔なの実はね…」

簡単に話を纏めると彼女は悪魔でこの紋章はコンタラクト紋章《コンタラクトスベル》という物で彼女との契約の証らしい。悪魔が人間界で力を使うには人間を触媒とするため人間との契約が不可欠らしく、悪魔の力を使えず困り、契約する人間を探していたそうだ。そこで自分の好きなららこたんがプリントされたTシャツを着ていた俺に白羽の矢が立ったらしい。これで彼女と俺は悪魔の力を使えるようになったが問題があった。悪魔の力を使うと、この紋章が複雑が増えていくらしく、このままでは顔が刺青だらけの人間になってしまう。彼女との交渉の末、春休みが終わるまでは力を使わないと約束をして貰ったが、悠長にはしていられない。春休みが終わるまでに紋章が拡がらないようにする紋章術をマスターしなければならぬからだ。

電話を切るとリリンから貰った針とにらめっこを始めた。

針は彼女が愛用していた針らしく、魔力を通しやすく、感じやすいため最初の紋章術の練習には打ってつけだそう。

針から鈴紐を外し、ららこたんの人形を作ることにした。裁縫などする事も無いため

苦戦し、また針が長すぎるため手に針を何度も刺し出来た人形が血まみれだったのはまた別のお話。

こうして俺は悪魔の道に足を踏み入れ、平穏な高校生活を手放しだったのだ。

6 騎聖

出会いました

高校2年生がスタートした。春休みだけでは紋章術を覚えられず身体中に刻印が拡がり学校に行くどころではなくなつた。結局学校に行けたのは1学期の終わりからだった。

学校には、眼帯をして刻印を隠しながら通っている。

クラス替えもあつたが1年の時からつるんでいる斜不良の幹部ハゲ落や影組でお馴染みの三鏡チャライハゲ、

鬼塚、黒木、出崎とも同じクラスだった。

何故こんなにハゲ率が高いかというと、帝毛工業高校に通っているからだ。学校の生徒は殆どがスキンヘッドの不良だが、県内ではトップクラスの就職率を帝毛は誇っている。その為、高卒で就職をしようと考えていた俺は帝毛に進学した。休みすぎて内申に傷が付くところだったが、それは悪魔の力ですり抜けた。

あれからも悪魔の力の修行を続け、魔力を糸として針で物を地面や壁に縫い付けたり、鈴の音で幻術や結界、力の弱い者には記憶の改竄まで出来るようになったからだ。最初は悪魔に恨みしかなかったが今では感謝しているレベルだ。この学校にいる以上

よくチンピラに絡まれるため、幻術で適当にあしらっている。俺が喧嘩する時は自分に利益がある時かマイ神（みらいごたん）に危害を加えた時だけである。

今は桜も散り蟬が鳴き、2学期が始まった。蟬は外の世界で数日しか生きることができないから畜生と叫んでいるじゃないかと自分の蟬についての持論を立て、蟬の悲しみの歌を聞きながら学校に登校した。

教室に入ると妙にそわそわした斜落がいた。話を聞くと、学校が全壊した石矢魔高校の生徒が、近くの聖石矢魔高校で教室の間借りをしているらしく、今日の放課後に石矢魔高校の奴らが調子に乗らないように石矢魔狩りをするらしい。誘われたが、今日はセーラーームーンの再放送が6時からある為断ることにした。

「今日はちよつ「こころ」に水樹カヤの写真集があるが」行かせて頂きます」

水樹カヤ、それはマイ神（みらいごたん）に声を吹き込んだ伝説の人で、声優、歌手として活動しており彼女の歌は全ての人を魅了する。彼女は人類の3大発明の1つであり、残りほらららたんと、二次元である。

放課後になると石矢魔狩りを開始した。と言っても自分は集団の1番後ろで付いて行くだけである。貰った写真集を見ながら歩いてみると集団の動きが止まった。どうやらターゲットを発見したらしい。しばらくすると取り巻きたちが斜落の名前を叫び始めた。どうやら振り返り討ちにあつたようだ。幹部を張る程の斜落を倒すやつが気にな

り、写真集から顔を上げると、緑色の髪の毛をした裸の赤ん坊を背負った不良と思われる学生がいた。

「えっ、なんで裸？」

不幸な1日でした

赤ん坊を背負った男は斜落を蹴り飛ばして壁にめり込ませた様だ。はつきり言つて人間技ではない。

依頼人は倒され報酬は前払いだった。うん、もうここにいる必要がない、それに無駄な喧嘩は趣味じゃない別に相手にビビった訳じゃないよ、ホントだよ。

斜落を抜いて帰るため、写真集を隣のハゲに渡し斜落の方に歩いている時に声が響いた。

「動くんじやねえ、坊っちゃん聖石矢魔高校の奴らがどうなつてもいいのか？今から黒霧さんが斜落さんの敵とつてくれっからよお」

振り向くと先程写真集を渡したハゲが坊っちゃん聖石矢魔高校の生徒を人質に取り勝手な勘違いをしていた。

「おい、何言つてん…」

否定の言葉を言おうとした時に言い切る前にハゲが吹き飛んだ。

「今後聖石矢魔の生徒に手出したら、うちらが黙つてないよ」

傘を俺たちに向けながらハゲを吹き飛ばしたであろう美女が啖呵を切ってきたが、頭に入つて来なかつた。気づいたら俺は走っていた。

「黒霧さんに続けー」

「帝毛舐めんなー」

様々な自分たちを奮い立たせる言葉が聞こえ、次々と人がゴミのように壁に飛んでいく。

俺は立ち止まり、しゃがみこんだまま動けなかつた。俺の手の中には切り刻まれ、ボロボロになった写真集があつた。

俺の頬から涙が伝い気づいたら傘を突き付けられていた。

「とつとと連中をつれて行きなさい」

どうやら俺以外は全滅したらしい。

「何でだよ、クソがあー」

俺は写真集がボロボロになったことの怒りに、叫びながら立ち上がった。

「なっ」

彼女は驚いた表情をし、傘で切りかかってきた。

俺は傘を顔面の前で受け止め握り折り無理やり手から引き離した。

「何すんだよ」

写真集の文句を言ってやろうとした時に俺の腹部に衝撃が走り壁に激突した。どうやら後ろから蹴り飛ばされたらしい。

今日はイライラすることが多すぎる。頭が上手く回らない。見ると赤ん坊を背負った男が俺の事を蹴つたらしい。傘の女は顔を赤らめている。なにこのラブコメ、塩撒きたいんだけど。取り敢えずリア充はほこるのが俺の流儀だ。制服を脱ぎ、ららこたんに十字を切り勝利を約束し殴りかかった。

俺は身体中ポロポロになりながら家に向かっていった。結局赤ん坊を背負った男を倒しきることが出来なかった。殴れば殴り返してくるし、蹴れば蹴り返してくる。気づけばお互い笑いあつて殴りあつていた。

きりがないと感じた俺は幻術で終わらそうと針を取り出した。その時に赤ん坊が騒ぎ始めた。

「ダアー、ダブダブダアー」

「おおく彼奴がいいんだな！そうかそうかじゃあ決まりだな」

そお言うくと赤ん坊を背負った男は赤ん坊を俺に押し付けてきた。

「いや、なにやってんの？」

思わず口から出た言葉だった。

あの後何を言つても赤ん坊を押し付けようとしてきて、余りのしつこさに赤ん坊に針を一本渡すことで許して貰った。赤ん坊をベル坊といい背負っていた男は男鹿という名前らしい。傘の女は石矢魔東邦神姫の邦枝だった。

その後針を渡した事をリリンに報告すると目茶苦茶怒られた、急に家に押し掛けてきたかと思うと、泣きながら、何回も目の前でららこたんに嫌われるという恐ろしい幻術をかけられた。

何回謝つても許して貰えず、泣き止むまで頭を撫で続ける事しか俺には出来なかった。

こうして俺の長い不幸な1日は終わった。